

マネージメント情報

2018年4月



この記事は、機関誌や日常の出来事の中からわれわれが注目した話題を皆様に提供するものです。
ご質問、ご要望などなんでもお寄せくだされば、今後テーマとして取り上げたいと思います。

TMR給与のポイント ～乳牛の能力を安全に最大限引き出すために～

酪農場の多頭化や相次ぐTMRセンターの設立にともなって、この根室でもTMR給与農場が増えてきています。この10年20年で乳牛の栄養学はすさまじいスピードで進歩しており、またサイレージの調整作業等も改善されていることから粗飼料品質なども格段に良くなってきており、TMR給与によって大幅に成績を伸ばしている酪農場がふえてきています。

しかし優れた技術というのは 諸刃の刃であることも多く、このTMR給与という技術も例外ではありません。今回はTMRをうまく使いこなすポイントをいくつか勉強してみたいと思います。

<TMRのデメリット>

- 条件によっては良くない結果が・・・ 例) TMRに変えたら生産も伸びたけど病気も増えた

これは亜急性ルーメンアシドーシス(SARA)のリスクを示しています。SARAは生産を落とすだけでなく、乳牛の生産病(周産期疾病・乳房炎・蹄病・繁殖障害・・・)すべてに直結しているとても重要な問題です。

TMRというのは言うなれば「1日分の穀類を餌槽に撒いてしまう方法」です。粗飼料と穀類を設計者の思惑通り牛が採食してくれることを前提に製造され給与されますが、本当に設計者の思った通りに製造されているでしょうか？あるいは牛はその通り採食してくれているでしょうか？

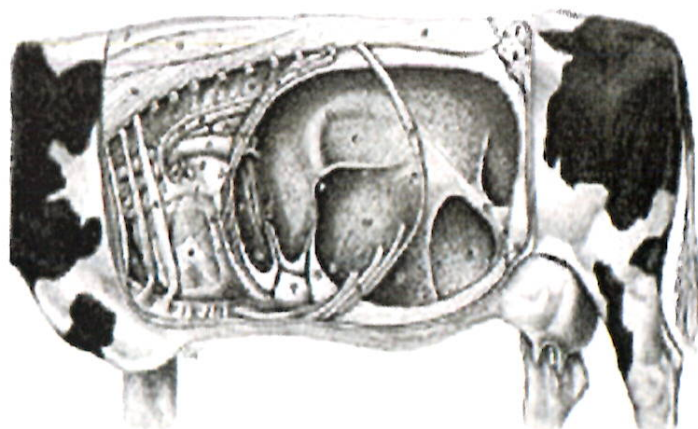
これらが破綻した時にTMR給与は思いもしない悪い結果をもたらします。

- 生産性のロス

あまりにかけ離れた乳量レベルや産次数の個体を同じ群に入れ同じTMR給与することは、個体ごとの栄養の過不足、乳生産の損失、飼料コストの増加などがおこりえます。

TMR1群管理の課題はここにあります。周産期の管理や繁殖管理に問題が出てくることもあります。

メリットを活かし、デメリットを克服するためにいくつかの注意点があるようです



● アシドーシスリスクを抑える工夫 ～農場ごとにアシドーシスリスクは違う～

給餌回数 : 給餌回数が1日1回よりも2～3回の方がリスクは低い

餌押し回数 : 採食行動を促し、TMR再混合にもなる。採食行動が多いほどリスクは低い。

カウコンフォート : 「立って食べて寝て反芻する」という牛の基本的な行動を妨げない

牛舎構造 : フィードレーンの広さは狭すぎないか？フィードレーンまでの移動はし易いか？

グループ分けの可否 : 分娩直後の牛や初産と経産の群わけ等、競合を避けるグループ戦略

選び食い : 穀類を選んで採食する選び食いはもっとも危険な採食行動のエラーとなる

固め食い : 採食行動が少なくなるような季節性、群構成にはなっていないか？

これらは牛の採食行動を決定づける要因として重要です。

1日に15回TMRを採食しにくる牛群と、1日に7回しかTMRを採食しにこない牛群とでは後者の方が圧倒的にアシドーシスリスクは高いのは理解しやすいと思います。

このような2つの群に対して同様のTMR給与コンセプトで良いのでしょうか？

乳牛の能力を安全に最大限引き出すためには

- その群ごと農場ごとのSARAリスクを見極め、乳牛の健康性を維持しながらその農場その牛群で達成可能な乳量レベルのTMRを設計する。TMRの設計はただの数値合わせではなく、農場ごとにコンセプトがあるべきである。
- 上記のSARAリスクの要因を可能な限り解決する。

ことが重要になってきます。

次回は

- SARAリスクを理解し解決する
- 生産性のロスを抑えるために ～TMR給与を効率化するためのグループ化～
について書きたいと思います。



マネジメント情報

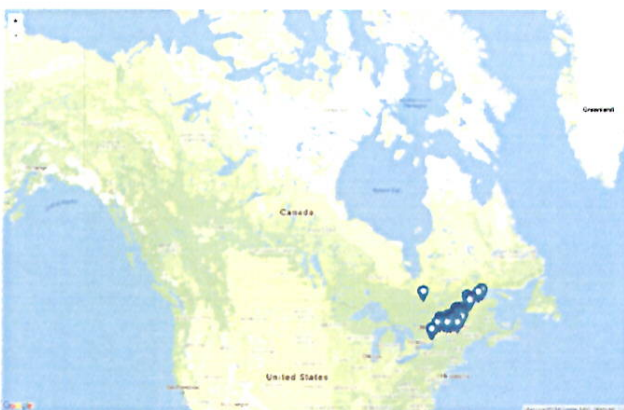
※カナダ・アメリカ研修報告【最終回】

改めてタイストール用の搾乳ロボットについて

昨年 11 月のこの欄で紹介しましたタイストール用の搾乳ロボットですがいよいよ動き出すことになりました。まだ具体的な日程は決まっていますが来月中旬に Milkomax 社より担当者が 2 名来日し、JA 道東あさひ管内で日本での代理店の予定となる(株)ピュアラインと現地調査を行います。タイストール牛舎構造・搾乳施設・乳牛のサイズ・集乳方法などについてカナダと日本の違いを実際に農場に行き調査し日本での早期導入を実現させようというものです。実現すれば日本初のタイストール用の搾乳ロボットが JA 道東あさひ管内で稼働することになります。先日現地調査の希望を募ったところ 11 軒の応募があったと聞いています。

【タイストール用の搾乳ロボットの導入地図 Milkomax 社 HP より】

<カナダ全図>



<カナダ東部地図>



(<https://milkomax.com/en/testimonials-milkomax/>で上記地図が表示されます)


英語ですがカーソルを合わせると農場の位置と概要が左下のように紹介されます。

CLOVERVIEW FARMS
INVERARY ONTARIO

- 3 robots -

"We didn't want to switch to a free stall barn and spend \$2 million or more on a new building. It was the best decision we made for our wives and families. Our wives would recommend this robot to anybody!"

- Jeff, Robert et Richard Sonneveld



昨年紹介したように全てがカナダの東部 2 州で導入され、Milkomax 社の本社があるケベック州が 95%、残りの 5%が隣のオンタリオ州となっています。

ロボットの導入状況(台数)ですが約 100 台と聞いています。85%が 1 台、15%が 2 台、3%が 3 台となっています。この規模で営農が可能ということがカナダ酪農の特徴になると思います。また世界的な調査会社 Infiniti Research Limited 社調べによると搾乳ロボットは世界で今後 7 年で 2 倍になるとのこです。私は搾乳ロボットに限らず多くの農業機械の自動化が急速に進むということだと考えています。

・日本全国でも根室でも酪農家全体に占めるタイストールの農場は 70%あります。タイストール用の搾乳ロボットがその一助になればと願っています。今後の動向が楽しみです。

マネージメント情報 2018年4月

～ 初産分娩月齢と初産時パフォーマンス ～

初産分娩月齢は何か月齢が適正なのか？何か月齢から育成牛の授精を開始したら良いのか？早い方が良い意見もあれば、24カ月齢分娩くらいになるように授精するのが良いという意見もあれば、もっと遅らせても良いという意見もあったりする。

分娩月齢のメリット・デメリットとしては一般的に下記のように言われているかもしれない。

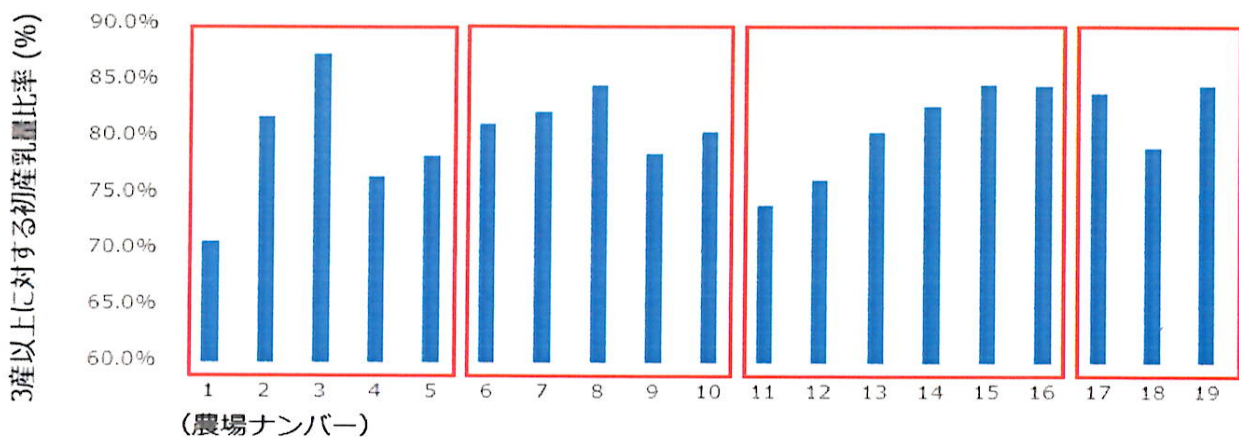
	分娩月齢 早い	分娩月齢 遅い
メリット	育成飼養コスト削減	初産乳量の増加 難産・死産の減少
デメリット	初産乳量の減少 難産・死産の上昇	育成飼養コストが増加

分娩月齢が早いと飼養する育成牛頭数が少なくすむ分、エサ代など飼養コストも下がるし、飼養スペースも数カ月齢分小さくてすむ。

しかし、分娩月齢が早い、例えば20カ月齢などではまだ体格が小さいためお産のときの難産や死産のリスクが高くなりやすいかもしれない。また、初産はまだ体格が小さく、初産搾乳中にも増体するため、分娩時の体格が小さいと増体にエネルギーが取られて初産乳量が出なくなる。そういうわけで分娩をあえて遅らせた方が難産や初産乳量が増えるから経済的に良いとする意見があります。

そこで弊社顧客農場の初産乳量、初産死産率について、分娩月齢別に差があるかどうか調べてみました。

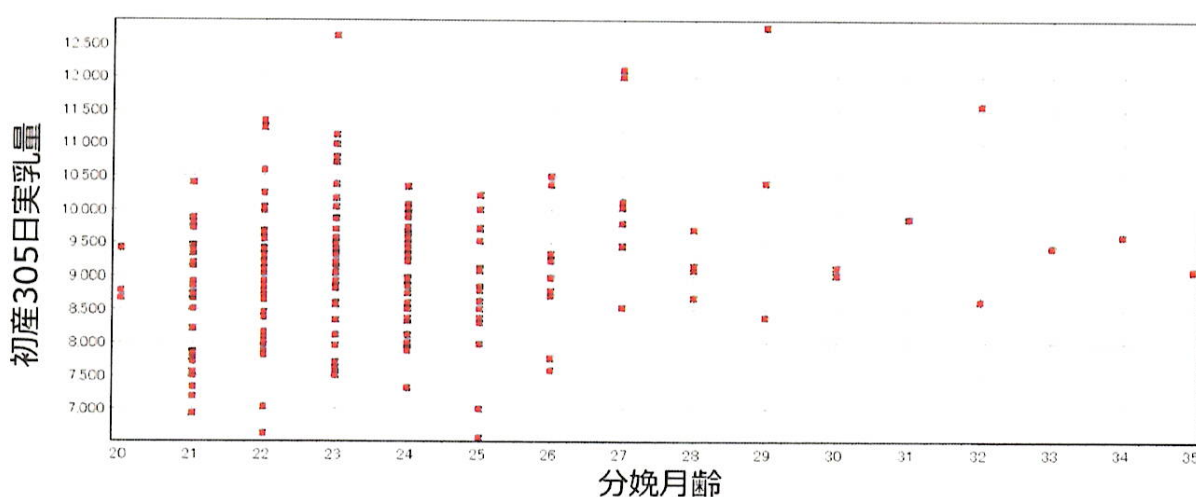
分娩月齢	22カ月	23カ月	24カ月	25カ月
初産乳量	8712 kg	8867 kg	8808 kg	8918 kg
3産以上乳量	11054 kg	10877 kg	10949 kg	10778 kg
初産乳量比率	79.1%	81.5%	80.6%	82.7%
初産死産率	10.7% (2.4~25)	5.5% (3.7~10)	10.1% (3.3~14.3)	5.7% (0~9.5)



上記表は各分娩月齢農場の平均の初産乳量、3産以上乳量、初産乳量÷3産以上乳量から算出した初産乳量比率、そして初産死産率をまとめたものです。その下のグラフは各分娩月齢ごとに区切ってそれぞれの農場の初産乳量比率をグラフにしたものです。

表とグラフを見てみるとバラつきは大きいにしても分娩月齢が短ければ乳量が少なくなって死産が増えたり、また分娩月齢が延長すれば乳量が増えたり死産が減ったりしているわけではなく、平均で見ると分娩月齢に初産のパフォーマンスが影響を受けているわけではなさそうです。

分娩月齢	21以下	22	23	24	25	26以上	初産平均
頭数	49	46	37	30	17	35	214
初産乳量	8859 kg	9079 kg	9394 kg	9081 kg	8775 kg	9494 kg	9110 kg
死産率	8.1%	6.5%	13.1%	13.8%	9.5%	8.1%	9.5%



また一つの農場内の分娩月齢別のパフォーマンスを見てみても上表の農場のように分娩月齢と初産乳量や死産率に相関がない農場はけっこう多いです。上グラフは同農場内の初産分娩月齢が横軸、その個体の初産時305日実乳量が縦軸になっており、分娩月齢が遅れることで増える乳量は小さそうです。

もちろん一般的に言われているように分娩月齢が早まると難産の上昇と初産乳量の低下が見られる農場もあるので簡単に結論は出せません。初産分娩時の推奨体重は月齢とは別に550kgほどとされていますが、それを達成できるのであれば分娩月齢が早くなっても初産のパフォーマンスは落ちないでしょう。

実際分娩月齢が早く（23カ月齢以下）でも初産のパフォーマンスが高い農場のほとんどは育成牛の授精開始を12～13カ月齢にはしていますが、それよりも授精時体高が130～135cm以上あるかどうかを指標に授精を開始しています。12カ月齢で体高130cmに育てられる農場は哺育から育成の増体が良く、早期受胎しても分娩時の体重を適正体重にもっていけることで初産パフォーマンスが落ちないでしょう。逆に分娩月齢が遅れ気味の農場は体高ができていないため育成の発情が13カ月齢を過ぎて来ず、授精開始が遅れています。

12カ月齢で授精できる体高にもっていける哺育育成管理が農場の初産パフォーマンスを大きく左右することはこういった部分からも推察されます。

子牛の下痢治療のポイント

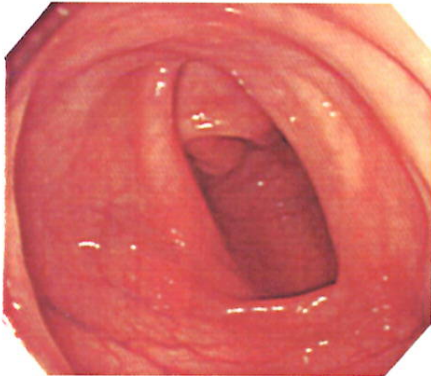
マネージメント情報では大分ご無沙汰してしまいました、松下です。

今回は、先日の THMS セミナーでお話させて頂いた子牛の下痢治療についてです。

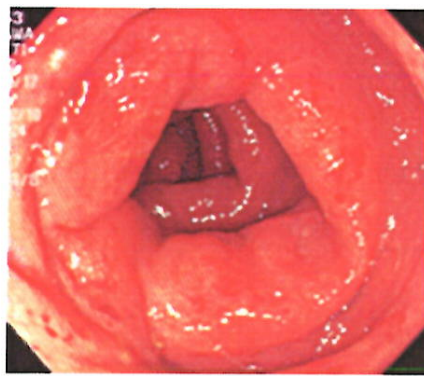
子牛はだいたい1週齢前後で下痢をします。

その原因はほとんどがロタウイルスやコロナウイルス、クリプトスポリジウムといったものですが、症状からは見分けがつかません。そしてこれらのウイルスや原虫には抗生剤は効かないので、直接的には効果はありません。そこで、消炎剤を注射しましょう！というのが今回の提案です。

☞ 下痢の時、腸管ではなにがおきているのか？



《正常》



《腸炎》

これは人の腸管の内視鏡画像ですが、右の写真は『腸炎』という名前の通り、ひどい炎症を起こしているのがわかります。このような状態では、腸管の水や電解質、栄養素の吸収能は低下してしまい、さらなる脱水、下痢へとつながります。

☞ 消炎鎮痛剤『メタカム』

様々な消炎鎮痛剤がありますが、それぞれ副作用や作用時間などに特徴があります。

今回子牛の下痢治療におすすめするのは、『メタカム』です。

消化管障害などの副作用が少ない！

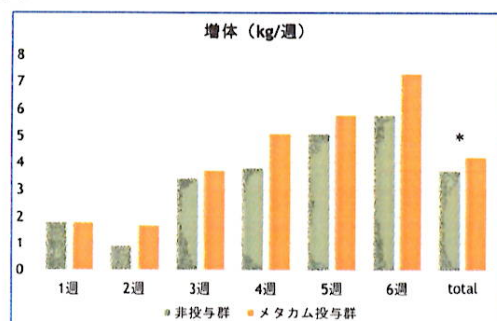
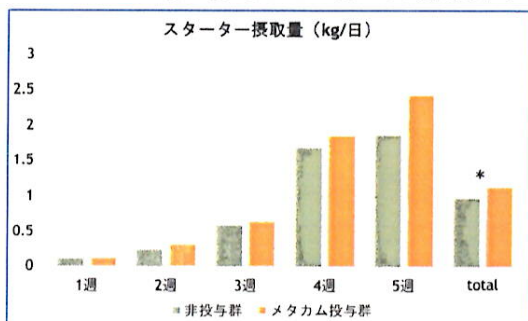
作用時間が長く、1回の投与で2日ほど効果が期待できる！

という良い点があります。



☞ ある研究では…

メタカム 0.5mg/kg 皮下注射 下痢開始時に投与



メタカム投与群では

- ◇ 脱水や便の状態の改善
- ◇ ミルクとスターターの摂取量増加
- ◇ 増体の改善
- ◇ 活発な時間が多い
- ◇ 不快さをあらわす行動が少ない

などの良い結果が得られ、『**下痢開始時のメタカムの投与は、症状を軽減し、子牛の回復を向上させる**』と示されています。ここで重要なのは、下痢の**開始時**に投与する！ということで、早期に治療を行い、下痢を重症化させないということです。

☞ トータルハードカーフサービスでは

毎日の哺乳・除糞時に便の状態をチェック！

- ハッチ内に落ちている便の状態
- 便が見当たらない
- ニオイが臭い
- お尻まわりをチェック などなど…

下痢を発見したら、1日目と3日目にメタカムを2ml投与しています。

☞ **経口電解質の給与：断乳は12時間以内に！**

カーフサービスでの経口電解質の給与は、下痢を発見した1日目の朝と昼のみで、夕方からはミルクの給与を2Lにして再開するようにしています。

症状に応じて増減はありますが、基本的に断乳はしません。

ミルクの給与は12時間以内に再開するべきで、断乳しても下痢の重症度や期間に差はないという報告がたくさんあります。経口電解質のみでは子牛の1日に必要な維持エネルギーを供給することができず、下痢からの回復を遅らせる危険性があります。

下痢は早期に発見して、早期に対処するというのが最も重要なことです。

子牛は1週齢前後で**必ず**下痢をすと思って、注意してみてください。

季節の変わり目は、人も子牛も体調を崩しがちです。

暖かくなってきたな～と気を抜かず…がんばりましょう！！

松下裕香

1年間のデータから蹄病を再考する③-(1)

DDについてはみなさんよくご存知とは思いますが、今回はDDについて整理したいと思います。

【趾皮膚炎 Digital Dermatitis (DD)】

DDとはDigital(趾) Dermatitis (皮膚炎)という英語の略語です。ちなみにPDDはPapillomatous (イボのような) という単語のPが付き、イボ状皮膚炎を指しますが、DDと同じ意味と考えてください。また、あまり目にする機会は少ないのですが、IDDという名称はInterdigital (趾間の) Dermatitisの略であり、蹄の間のDDを指します。今回はこれらを区別せず、全てDDとして扱いたいと思います。右の写真はある牧場の育成牛の後肢で発生したDDです。DDは1972年にイタリアで最初に報告された蹄病で、その後、世界中に広まっています。



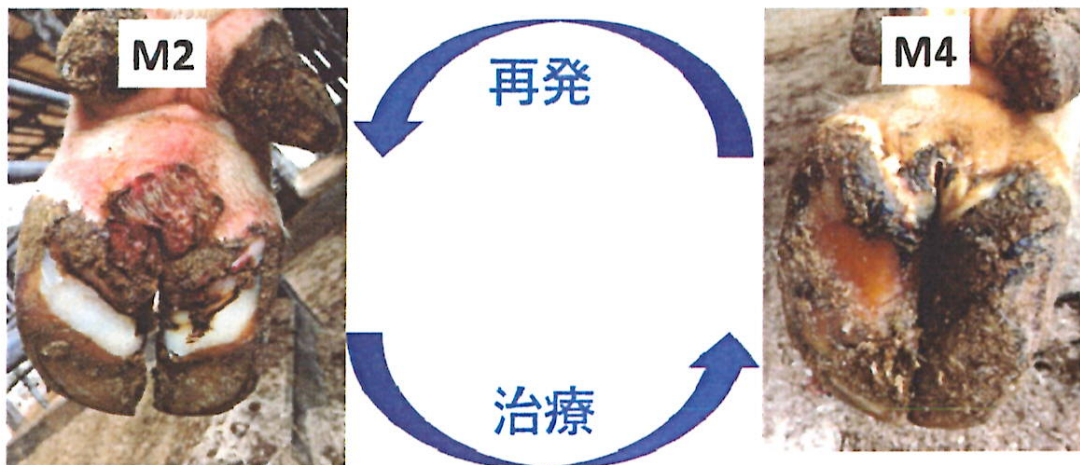
【DDの原因】

DDはトレポネーマという、らせん菌が原因と考えられています。実はDDの原因については、私の知る限り、科学的に完全に証明されていないようです。しかし、様々な知見からトレポネーマ属による感染症と考えて良いと思います。そして、蹄底潰瘍や白線病の様な疾患と根本的に違うのはDDが感染症であるということです。

トレポネーマ属は嫌気性という特徴を持ちます。嫌気性＝酸素が嫌いなので、酸素に触れないところを好みます。そして皮膚の表面でなく、酸素の届きにくい深部へ感染します。また、一般的に菌は湿気を好む傾向にあるので、糞便が付着した足の皮膚はトレポネーマにとって非常に生育しやすい環境といえます。

【DDのステージ】

DDはM1(初期病変)やM2(急性病変・跛行あり)、M4(慢性病変・跛行なし)など様々なステージをとります。多くは跛行を示すM2の状態です。M2の状態では獣医師に診療依頼が来るか、削蹄師さんが発見して治療しますが、DDは一度感染すると、なかなか完治しません。M2を治療して、跛行が消失したとしても、M4という状態では皮膚の深部にトレポネーマは潜んでいます。そして、免疫力の低下や蹄浴の中止などをきっかけとして、再度M2へと移行します。



【DDの治療】

DDの治療法は単純で、抗生物質を病変部に塗りバンデージを軽く巻く、これで終わりです。（実際はもう少し細かく気を使うポイントがあるのですが、割愛します。）しかし、昨今は抗生物質の乱用に対して、耐性菌の出現や食品安全の面で様々な規制が作られつつあります。そこで、私も抗生物質以外の治療を試したので少し紹介します。

今回はHoof-fitとグリーンアグロンを使ったDDの治療に経過について紹介します。Hoof-fitはキレート銅とキレート亜鉛にアロエベラエキスを加えた粘度のある液体です。グリーンアグロンは天然のアルミ鉱物を用いた粉末で蹄浴剤として使われています。このHoof-fitとグリーンアグロンをDDの病変部（上の写真）に塗布し、ガーゼで覆ってバンデージで巻きました。そして1週間後にチェックした時の画像が下の写真です。

初診時は強い跛行を示しましたが、1週間後には跛行は消失していました。1週間後では両方ともまだ治癒の途中ですが、この2つの組み合わせによる治療でも効果は期待されると思います。

今後はOTCを用いた治療法と比較して、どの程度効果があるのかを検討していきたいと思います。

症例1

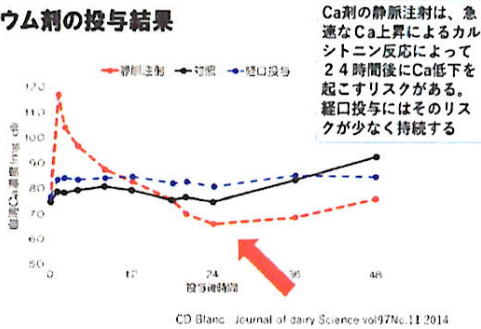


症例2



1. 分娩牛へのCa剤投与：投与方法と回数、その影響

カルシウム剤の投与結果



Ca静脈注射と血中Ca (乳熱：ポログルコ酸Ca 10.5g)

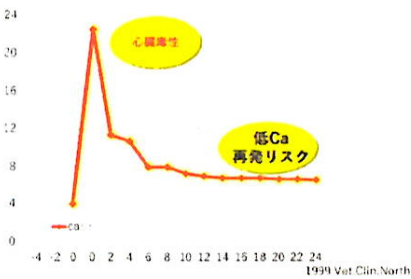


図1

図2

図1と2はそれぞれ別の試験結果ですが、それぞれの赤いラインは分娩後にCa剤を静脈注射した時の血中のCa濃度の推移を示しています。いずれも、急速に上昇したあと急速に低下しその後、低カルシウム状態（潜在性）になることを示しています。Caを急速に上げると、これは生体にとって非常に危険な状態になるので、すぐにカルシトニンというホルモンが分泌されます。カルシトニンは、Caの骨からの動員を抑制して、逆に骨へのCa沈着を促進します。同時に尿から急速にCaを排出させてしまいます。このような状況では、注射後30分ほどで2g（総注射Caは、おおよそ9~10g）ほどは、尿にあっというまに排出されてしまうといわれています。そしてその後は、いわゆる負のフィードバック（カルシトニンが効きすぎて）によって、逆に低Ca状態になるリスク（潜在性の低Ca血症）が高まってしまうということです。この時に食欲（DMI）の低下が起きて別の疾病へ波及するリスクも高まるということになります。

図1の青の点線は、Ca剤を分娩直後とその12時間後に経口投与したものです。これによってCaの血中濃度の急速な上昇とその後の低下が起きにくくコントロール群に比べて安定的に高く維持できているのが解ります。カルシトニンの分泌も起きていないと思われます。従って、分娩後すでに低Ca症状を出している（起立不能）ものは、静脈注射でよいのですが、そうでない牛には経口Caを2回投与（分娩直後と12~16時間後）することが推奨されます。どんな牛にもどんどんCa剤を静脈注射することは避けたほうがよいということになります。

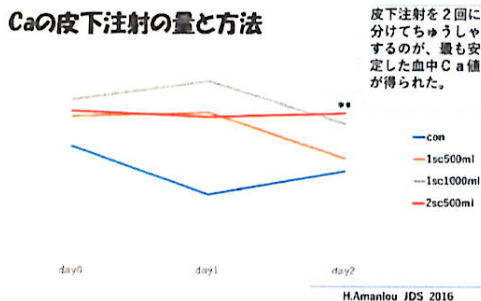


図3

図3は、別の試験ですがそうした血液中のCaを安定的に高めるための、皮下注射による試験です。この試験で使われたCa剤は日本で利用されているものの2倍の濃度のものだったので、それを日本のCa剤濃度と量に換算して示していますので、ここに示した量は普段お使いのCaとして考えてよいです。オレンジはCa剤500mlを分娩直後に1回皮下注射したのですが、1日後には低下してしまいます。グレーは1000ml(500ml2本分)を分娩直後に1回皮下注射しものですが、少し上昇が高く、やはり2日目に低下しています。もっとも安定していたのは、500mlの皮下注射を分娩直後と12~18時間後に2回に分けて投与した赤でした。現在農場で行われるCa剤の投与方法についても、よく考えることが重要です。特別な症状を示さない経産牛に対して、予防的にCaを投与するときには、経口投与か皮下注射を2回に分けて投与することが望まれます。分娩後の乳牛に対して再度その投与方法を考えてみてください。きっとより良い結果がえられると思います。“めんどくさい”という理由は、(自分の生活を支えてもらっている)牛に対してちょっと失礼かなと思いますが・・・。

2. ロボットでの濃厚飼料の給与を増やせば成績が上がるのか？

先日東京でCNCPSの勉強会がありました。その中でロボットにおける飼料設計の講義がありました。ロボットに牛をうまく導くためにロボット内で濃厚飼料を給与しますが、その量を増やすほうがよいのか、少なくともよいのかどうかという今回のテーマについての研究が紹介されています。

University of Saskatchewan

ロボットでの濃厚飼料給与量を増やせば、成績は上がるのか？

- ホルスタイン種搾乳牛115頭 (191 DIM)
 - ロボット内飼料給与量3 kg vs. 8 kgを比較
 - ガイドラフィック(フィードファースト)
 - PMRのエネルギーレベルは同じ

Bach et al., 2007

www.usask.ca

図1

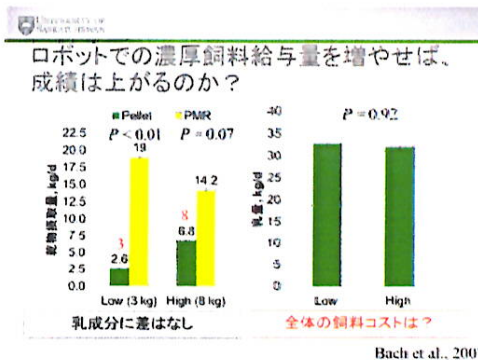


図2

この実験ではフィードファーストの AMS(ロボット:Auto Milking System)で PMR (Partial Mixing Ration) のエネルギーレベルは同じにしてあります。乳成分と乳量には差はありませんでした。ロボット内で濃厚飼料を多く食べた牛は当然 PMR の摂取量が落ちて、結果乳量・乳成分に差はなかったということでした。そうすると、全体の飼料コストあるいは、乳代から飼料費を差し引いた IOFC (Income Over Feed Cost) の点でどちらに分があるのでしょうかということになります。

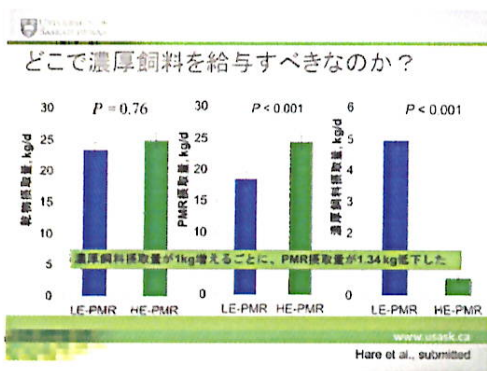


図 3

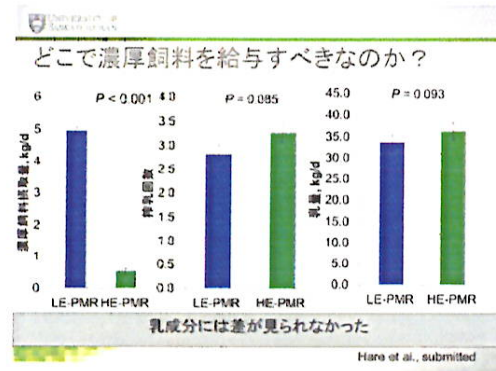


図 4

図 3 と 4 は、PMR のエネルギー濃度が低くロボットでの濃厚飼料を多給した（青：LE-PMR）と PMR のエネルギー濃度を高くロボットでの濃厚飼料を低くした（緑：HE-PMR）ものを比較しています。トータルの乾物摂取量に大きな差はなかったですが、当然、青の LE-PMR のほうが AMS での濃厚飼料の摂取量は高くなっていましたが、AMS への訪問回数に差はなくむしろ HE-PMR が高いくらいでした。また乳成分や乳量にも有意な差なかったものの、どちらかという HE-PMR が高くなりました。ルーメンの安定や飼料コストを考えると、安易に AMR への訪問回数を意識した AMR ないでの濃厚飼料給与量を多くすることにメリットはないようです。

半年間というウガンダでの生活が終わり、先日帰国しました。最初は右も左もわからず、初めてトータルの農家さんに接したときのことを思い出しながら、仕事をしてきました。現地で実際に治療行為を行うことができなかった私は、たとえば、乳房炎の結果をまとめ今後のアドバイスなどを記入したものを渡すというようなことでしか、フィードバックを与えることしかできませんでした(プロジェクト自体でもきちんと結果をまとめ、還元しています)。しかし、結果を受け取った農家さんは、「搾乳方法や消毒など、アドバイス通りにやってみるよ」と行動に移すことを約束してくれました。実際にすでに器具を自分で購入し、より適切な、そして牛にも人にも安全な搾乳を始めている所もあります。



ムバララで活動をして感じたのは、現地では酪農の知識がないわけではないということです。テキストが出回っていたり、セミナーなども行われています。なぜ実際の酪農マネージメントに活かすことができないのか、これには様々な理由が考えられます。金銭的な問題や農場オーナーの不在、施設の未整備だったり、また従業員が安定しなかったりといった日本と同じような状況もみられました。輸入精液も入ってきており、牛の体型だけ見たら日本のそれと変わらないような農場もありました。ただ、土着牛とのクロスのため、また、AIを実施していない農家が多いなどの理由から繁殖の問題は付きまとい、乳量も期待するほどの増加は見込めないかもしれません。獣医学的な点でいえば機材やキャパ不足で検査体制が未整備で、たとえば感染症などの病気が発生しても適切な処置をされなかったり、原因不明のまま病気を拡散させてしまうこともあります。酪農家(によっては)はやるべきことをやっているのに、そこで足を引っ張るような状況を作り出しているのは非常に残念です。しかし現場の獣医や普及員の方々が怠慢かというところではないと思います。もちろん日本のようにスティックに働いている人は多くはないですが、少なくとも一緒に仕事をしてきたパートナーの人たちは自分のできる仕事を一生懸命にやっていました。そのような困難な状況にあって、政府レベルでの枠組みをつくることや、感染症の監視体制を整えることが必要だと感じましたが、そこに任せきりにせず、待つのではなく自分たちのできることをやるというスタンスは農家さんだけでなく、現地の普及員の方からも感じました。

私が巡回していた農家さんはすべて手搾りをしていたので、乳頭口はとてもきれいでした。しかし乳房炎が蔓延していないというわけでもなく、きちんとプレディッピング、ポストディッピングする必要はあります。これから機械搾乳を導入していく酪農家も増えるでしょう。プロジェクトの普及している推奨が、現在の状況はもちろん、未来のムバララの酪農の発展にも繋がると信じています。

私はこれからも、世界の酪農家がより良く経営でき、安定した収入を得られるよう手助けするような仕事をしていきたいと考えています。発展途上国では感染症というものが一つの大きなキーワードになっています。それらが農業の発展を足踏みさせ、思うように前に進まないという状況を、改善していけたらと思います。またいつか皆様に近況をご報告できれば幸いです。M 情報を通じて最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。



茅野 大志

自己紹介

はじめまして、2018年4月から（株）トータルハードマネジメントサービスにて働くことになりました富田大祐です。去年、一昨年と実習に来た際にお会いした方もいらっしゃると思いますが、改めて自己紹介させていただきます。



名前 富田 大祐（とみた だいすけ）

生年月日 1988年12月18日（29歳）

出身地 東京都

出身大学 酪農学園大学

家族、親戚には獣医師はおらず、酪農に従事している人もいません。大学に入学するまで畜産動物に携わる獣医師の存在すら知りませんでした。大学での農場実習を通して酪農に初めて触れ、畜産動物の獣医師についても知りました。同時に牛に魅せられ、畜産動物の獣医師を志しました。その後トータルハードマネジメントサービスで実習をさせて頂き、検診やマネジメント業の存在を初めて知りました。畜産動物の獣医師の仕事は診療だけだと思っていた私にとっては衝撃的であり、同時に私自身もこれらのことが出来るようになりたいと強く思うようになりました。また、農家さんと獣医師の間にある信頼関係がとても印象的でした。

色々とお話させていただきましたが、こう書いた方が私がお話の通り伝わり易いと思います。みなさんの中には去年の今頃、こんな話を聞いた方がいらっしゃるかもしれません。「斎藤先生の他にもう一人入社する予定だった。そのもう一人は国家試験に落ちてしまい獣医師になりそこねてしまった。」と。

そうです、そのもう一人が私です。1年遅れになってしまいましたが、1日でも早く皆さんのお役にたてるように精一杯努力してまいります。至らない点も多々あるかと存じますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

富田大祐

～ご挨拶～

2018年4月に入社した越前 萌です。
食べる事と寝ることが大好きな18歳です。
ジャニーズの Kis-My-Ft 2 が大好きです！
中学ではバドミントン部、高校ではラグビー部に所属していました。けれど体を動かすことはあまり好きではありません。
しかし、部活を引退してから太ってしまいましたので太った分痩せたいと思います！
早く仕事を覚えて皆さんに迷惑をかけないように頑張ります。これから宜しくお願い致します。



皆様、はじめまして。

4月より事務として入社しました西村香奈美と申します。



祖父母が昔、酪農を営んでいたこともあり、小さい頃から牛と触れ合う機会があり、

高校も酪農科を専攻するほど牛に興味がありました。

この酪農王国別海で事務として少しでも農家さんへお役立ち出来たらと思い、今回THMSさんで働けることが出来大変嬉しく思っています。

ですが、知識としてはゼロに近いです。聞いたこともない言葉の数々で戸惑うばかりですが一つ一つ覚えるのが大変です。

まだまだ未熟者で、ご迷惑お掛けするかもしれませんが、先輩方の仕事を見て早く同じ様に働けるように頑張りますのでよろしくお願い致します。

